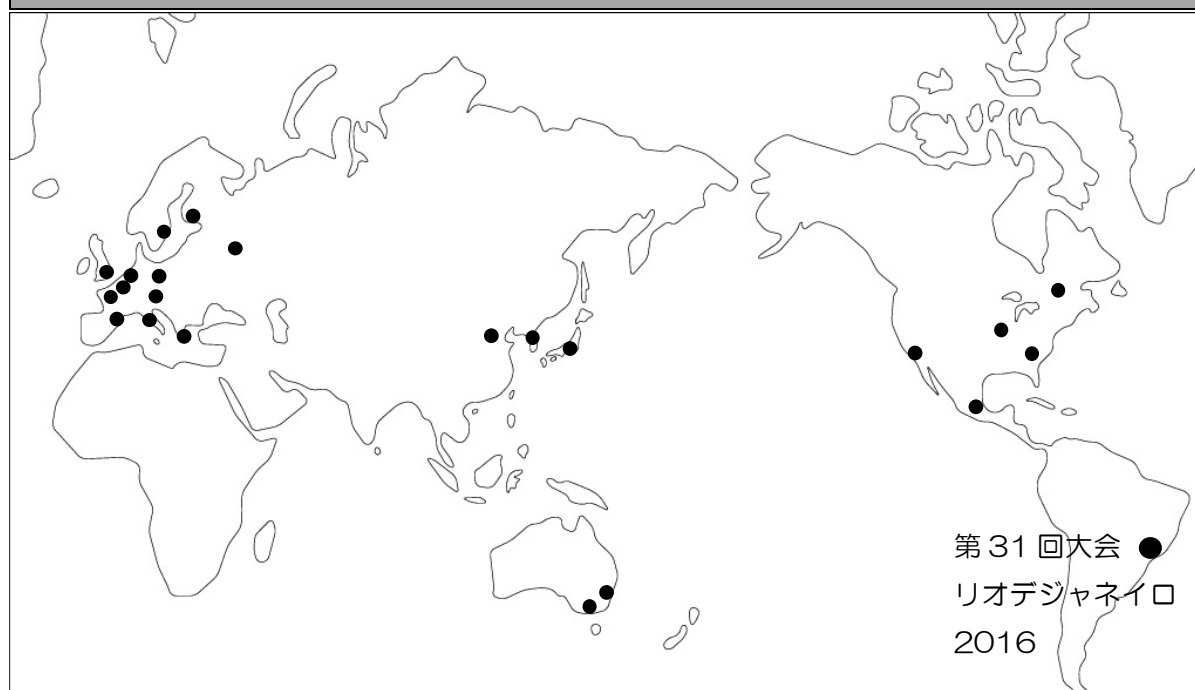


# News Letter

2016  
Summer issue

平成 28 年 8 月 12 日発行

*Japan Society of Physical Education, Health and Sport Sciences  
Division of Sociology of Physical Education and Sport*



近代オリンピック 夏季大会開催都市の分布

## 日本体育学会 体育社会学専門領域

事務局：

〒352-8558

埼玉県新座市北野 1-2-26

立教大学コミュニティ福祉学部

松尾哲矢 研究室内

Tel & Fax: 048-471-7345

E-mail: tmatsuo@rikkyo.ac.jp

### < 目 次 >

プレセッションのご案内	1
第 67 回大会スケジュール	2
一般発表・ポスター発表プログラム	2
専門領域シンポジウム	6
第 67 回大会発表形式	6
2015 年度専門領域総会報告	6
2015 年度学生研究奨励賞 受賞者コメント	11
影山健先生追悼	13
事務局より	15

## 2016年度プレセッションのご案内

このたびは体育社会学専門領域では、8月に開催される日本体育学会第67回大会の前日に下記のようなプレセッションを企画いたしました。多くの会員の皆様の参加を賜りたく、ご案内申し上げます。参加ご希望の方は、下記参加申込フォームより手続きをお願いいたします。皆様の参加をお待ち申し上げます。

日時：2016年8月23日（火）12：00～20：00

会場：関西大学堺キャンパス 大阪府堺市堺区香ヶ丘町1丁11番1号  
南海電鉄高野線「浅香山」駅下車、徒歩1分。

参加費：無料

懇親会費：3,000円

参加申込フォーム：

<http://goo.gl/forms/K38wT2b3tOhp08I42> より

参加受付締切日：

懇親会の準備のため参加申込の締切を次の日時とします。

平成28年8月16日（火）17：00まで

プログラム：

**【第1部】 13：00～16：30 キーノートレクチャー及びフォーラム**

「体育社会学の今後の在り方について考える」

13：00～13：10

代表挨拶および趣旨説明

菊 幸一 氏（筑波大学）

13：10～14：00

キーノートレクチャー 「スポーツ社会学からみた体育社会学の独自性」

井上 俊 氏 （日本スポーツ社会学会元会長、大阪大学名誉教授）

14：00～16：30

フォーラム 「体育社会学の今後の在り方について語る」

- ・原 祐一 氏（岡山大学）
- ・北村 尚浩 氏（鹿屋体育大学）
- ・杉本 厚夫 氏（関西大学）

コメンテーター 井上 俊 氏

コーディネーター 清水 諭 氏（筑波大学）

**【コーヒーブレイク】 16：30～17：00**

**【第2部】 17：00～18：00 意見交換会**

「次年度のシンポジウムに向けてのラフスケッチ」

- ・高峰 修 氏（明治大学）
- ・菊 幸一 氏（筑波大学）

- ・奥田 睦子 氏 (金沢大学)
- ・清水 諭 氏 (筑波大学)

【懇親会】 18 : 30 ~ 20 : 00

## 第 67 回大会スケジュール

1. 大会日程 2016 年 8 月 24 日 (水) ~ 26 日 (金)
2. 開催会場 大阪体育大学
3. 体育社会学専門領域プログラム
  - < 8 月 24 日 (水) (1 日目) >
    - 10:20-11:10 口頭発表①② (P401/P501)
    - 11:20-12:10 口頭発表③④ (P401/P501)
    - 12:30-13:30 評議員会 (P401)
  - < 8 月 25 日 (木) (2 日目) >
    - 9:00-12:00 専門領域シンポジウム (P501)
    - 12:00-13:00 総会 (P501)
    - 13:05-13:55 口頭発表⑤⑥⑦ (P401/P501/P502)
  - < 8 月 26 日 (金) (3 日目) >
    - 9:00-10:15 口頭発表⑧⑨⑩ (P401/P501/P502)
    - 10:35-11:25 口頭発表⑪⑫⑬ (P401/P501/P502)
    - 11:35-12:05 ポスター発表 (第 6 体育館)
    - 13:00-13:50 口頭発表⑭⑮⑯ (P401/P501/P502)

## 第 67 回大会一般発表・ポスター発表プログラム

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — 【8 月 24 日 (水)】 — \* — \* — \* — \* — \* — \* —

### 口頭発表① / 会場 : P401

座長 : 中塚義実 (筑波大学附属高等学校)

10:20 小副川滉太 (岡山大学大学院)

体育授業が苦手な教師が抱える感情経験

10:45 石澤伸弘 (北海道教育大学札幌校)

部活動に不安を感じている教員の実態 : HATO プロジェクトにおける調査結果から

### 口頭発表② / 会場 : P501

座長 : 甲斐健人 (東北大学)

10:20 中澤篤史 (早稲田大学)

全国中学校体育連盟の形成過程

10:45 金森史枝 (名古屋大学大学院)

研究総合大学における体育会運動部の活動意義 : 4 人の学生アスリートによる語りの分析



**口頭発表⑧／会場：P401**

座長：浅沼道成（岩手大学）

9:00 緒方勇氣（鹿屋体育大学）

青少年における日本のバレーボール競技力への期待と満足度

9:25 久保雄一郎（神戸大学大学院）

「体操のまち」S市における体操競技振興に関する一考察

9:50 松本和也（神戸大学大学院）

参加形態の違いによる大学生のスポーツ・ボランティア意識の比較

**口頭発表⑨／会場：P501**

座長：石坂友司（奈良女子大学）

9:00 大沼義彦（日本女子大学）

オリンピック・レガシー論の検討：英国におけるスポーティング・レガシーへの「予見」から

9:25 東明有美（首都大学東京）

東アジアにおける公共スポーツ施設政策の国際比較研究

9:50 木村良輔（鹿屋体育大学）

スポーツを通じた国際開発に関する研究動向と今後の課題

**口頭発表⑩／会場：P502**

座長：西村秀樹（九州大学）

9:00 近藤誓（東京学芸大学大学院）

競馬と賭博

9:25 高水あゆみ（東京学芸大学大学院）

「ユニフォーム」と「仮装」：スポーツに現れた身体加工の社会性

9:50 斎藤貴博（東京学芸大学大学院）

学校体育に現れる子どもの貧困問題

**口頭発表⑪／会場：P401**

座長：藤井雅人（福岡大学）

10:35 清水友輔（東京学芸大学大学院）

体育の選択制授業のフィールドワーク：学習者のスポーツ選択行為の意味とは

11:00 佐藤聖（東京学芸大学大学院）

若者はスポーツの何を見ているのか：自他の境界化と脱境界化

**口頭発表⑫／会場：P501**

座長：工藤保子（笹川スポーツ財団）

10:35 上代圭子（東京国際大学）

既婚女性のスポーツ参加要因に関する研究

11:00 橋本剛幸（近畿大学生物理工学部）

スポーツへの意識と防災への意識の融和

：学生との協働によるコミュニティスポーツ形成に向けて

**口頭発表⑬／会場：P502**

座長：杉本厚夫（関西大学）

10:35 種谷大輝（立教大学大学院）

運動部における補欠のアンビバレンスに関する実証的研究：大学準硬式野球部員に着目して

11:00 竹内秀一（学習院大学）

運動部活動におけるプレイヤー・アイデンティティの変遷と力学

：スポーツ漫画のキャラクター分析から

**ポスター発表／会場：第6体育館**

座長：清水一巳（千葉敬愛短期大学）

11:35 横山茜理（北翔大学）

子どもの体力向上を目指す北海道の取り組み：E市における要因分析に着目して

11:45 佐藤馨（びわこ成蹊スポーツ大学）

スポーツ系大学生のスポーツ指導意欲とジェンダー意識に関する研究

：スポーツ指導における男女の違いに着目して

**口頭発表⑭／会場：P401**

座長：森浩寿（大東文化大学）

13:00 片岡尚也（岡山大学大学院）

不祥事を起こした運動部が「無期限活動停止処分」を意味付けていく更生過程

13:25 鈴木秀人（東京学芸大学）

運動部における暴力的行為の継承に関する一考察：「軍隊起源説」の再検討

**口頭発表⑮／会場：P501**

座長：北村尚浩（鹿屋体育大学）

13:00 高平健司（筑波大学大学院）

「武道」とは何か？嘉納治五郎の「柔術」から「柔道」への展開から考察する

：「日常生活としての修養」における「個人」と「社会」の理想的なあり方に着目して

13:25 倉品康夫（早稲田大学グローバルエデュケーションセンター）

弱肉強食を否定する「他者救済」思想を実現する生涯スポーツとしての野外活動

**口頭発表⑯／会場：P502**

座長：迫俊道（大阪商業大学）

13:00 田嶋大樹（東京学芸大学）

附属学校・大学・地域連携型放課後児童クラブがもたらす意味世界

: 子どもたちの運動遊びに焦点をあてて

13:25 井上翔太 (東京学芸大学大学院)

“Communication” の側面に着目した体育における ICT の活用方法に関する研究

### 第 67 回大会専門領域シンポジウム

日時 : 2016 年 8 月 25 日 (木) 9:00-12:00

会場 : 大阪体育大学 P501

テーマ : 2020 年東京オリンピック・パラリンピック後のスポーツ環境を考える

ディスカッサント : 杉本厚夫 (関西大学)

司会 : 清水諭 (筑波大学)・北村尚浩 (鹿屋体育大学)

演者 : 内田若希 (九州大学)

スポーツ環境を変革できる可能性と課題

山口香 (筑波大学)

世界の中の日本の状況

山口理恵子 (城西大学)

スポーツ環境の変革に向けた研究・教育の課題と可能性

野口亜弥 (スポーツ庁)

エンパワーメント実践における課題と可能性

### 第 67 回大会発表形式

- ・第 67 回大会における本領域の発表数は、口頭発表 35 演題、ポスター発表 2 演題です。
- ・口頭発表は 1 演題あたり 25 分間 (発表 15 分間、質疑応答 10 分間) です。
- ・ポスター発表では座長の進行により、各自 10 分間のプレゼンテーション後、設定時間内で個別ディスカッションを行います。
- ・詳細につきましては第 67 回大会プログラムをご参照ください。

### 2015 年度専門領域総会報告

<2015 年 8 月 29 日 (木) 12:00~13:00 日本体育学会第 66 回大会開催時 於 : 国土舘大学世田谷キャンパス、出席者数 : 38 名>

#### I. 2014 年度活動報告

##### 1. 研究委員会報告

1) 日本体育学会第 65 回大会一般研究発表

一般研究発表 35 演題 (口頭発表 30 演題、ポスター発表 5 演題)

2) 第 65 回大会専門領域シンポジウム

日時 : 2014 年 8 月 28 日 (木) 10:00~12:00

会場 : 岩手大学農学部ぼらんホール

テーマ : わが国におけるメガスポートイベントの社会文化的意義と課題

演者 : 石坂友司 (奈良女子大学)

〈オリンピックの遺産〉の社会学—メガイイベント研究の課題—

大沼義彦（日本女子大学）

企図されたレガシー：ポスト・オリンピックの英国スポーツから

広瀬一郎（スポーツ総合研究所株式会社）

五輪開催のレジェンド～何を作り、残すべきか～

コーディネーター：高橋義雄（筑波大学）

### 3) シンポジウム報告書の発行

採録『わが国におけるメガスポーツイベントの社会文化的意義と課題』 発行部数：500部

### 4) 第65回大会合同シンポジウム

日時：2014年8月26日（火）16：00～18：00

会場：岩手大学アイーナホール

テーマ：保健体育教師への学際的アプローチ：体育教師の資質・力量とその質保障を考える

演者：四方田健二（九州共立大学）

教師教育論の立場から～体育教師は何をどのように学んでいるか～

朝倉雅史（筑波大学大学院）

人的資源マネジメントの立場から～体育教師の質をどうマネジメントするか～

中澤篤史（一橋大学）

社会学の立場から～体育教師はなぜ運動部活動にのめり込むのか～

坂本拓弥（明星大学）

身体論の立場から～「身体としての体育教師」とは何か～

指定討論者：木原成一郎（広島大学）

司会：清水紀宏（筑波大学）

## 2. 編集委員会報告

### 1) 専門領域一般発表論文集の発行

体育社会学専門領域一般発表論文集第22号 500部発行

### 3. 学生研究奨励賞選考委員会報告

#### 1) 学生研究奨励賞の選考

舟橋弘晃（早稲田大学大学院）

「エリートスポーツ政策に対する国民の受容態度の形成メカニズムとは？

：共分散構造分析を用いた因果モデルの検討」

## 4. 事務局報告

### 1) ニュースレターの発行

News Letter 2014 Summer issue 430部発行

News Letter 2015 Spring issue 430部発行

### 2) 専門領域の会員数

体育社会学専門領域の会員数403人（2014年5月12日現在）



Ⅱ. 2014年度 決算報告

日本体育学会体育社会学専門領域 2014年度収支決算報告

収入の部

項目	予算額(A)	決算額(B)	差額(B-A)	備考
会費	1,140,000	1,134,000	-6000	
学会補助金	100,000	104,700	4700	
論文集等販売	20,000	2,000	-18000	
小計	1,260,000	1,240,700	-19300	
前期繰越金	1,287,669	1,287,669	0	
収入合計(小計+繰越金)	2,547,669	2,528,369	-19300	

支出の部

項目	予算額(A)	決算額(B)	差額(B-A)	備考
通信費	150,000	79,124	-70876	
事務・用品費	120,000	80,930	-39070	
旅費・交通費	100,000	60,496	-39504	
論文集印刷費	500,000	292,400	-207600	
会報等印刷費	300,000	374,888	74888	
会議費	20,000	34,251	14251	
謝金	100,000	80,000	-20000	
アルバイト費	100,000	59,000	-41000	
学生研究奨励賞	30,000	30,000	0	
小計	1,420,000	1,091,089	-328911	
予備費	1,127,669	-		
次期繰越金	-	1,437,280		
支出合計(小計+繰越金)	2,547,669	2,528,369	-19300	

単年度(2014年度)収支差額

収入	1,240,700
支出	1,091,089
差額	149611

会計監査報告

日本体育学会体育社会学専門領域2014年度会計は、帳簿、領収書、郵貯振込控え等、すべて適正に処理されていることを認めます。

平成28年3月31日 監事 富山浩三 印

平成28年3月31日 監事 佐藤 馨 印

※決算報告書の原本は事務局にて保管してあります。

### Ⅲ. 2015年度 活動計画案

#### 1. 評議員会

第1回 6月6日(土)(書面会議) / 第2回 6月27日(土)(書面会議)

第3回 8月25日(火) / 第4回 2016年3月21日(月)

#### 2. 研究委員会

##### 1) 日本体育学会第66回大会一般研究発表

一般研究発表 31 演題 (口頭発表 28 演題、ポスター発表 3 演題)

##### 2) 第66回大会専門領域シンポジウム

日時: 2015年8月27日(木) 13:00~16:00

会場: 国士舘大学世田谷キャンパス

テーマ: Beyond2020 & Agenda2020 から体育・スポーツ社会学の研究はいかなる方向に向かうべきなのかー都市、地方、多様性、差別、成熟、開発、震災ー

演者: 結城和香子 氏 (読売新聞社編集委員)

「IOC『アジェンダ 2020』の意図と東京大会」

有元健 氏 (国際基督教大学)

「個別性と全体性:2020東京オリンピック・パラリンピック開催と都市のヘゲモニー」

白井宏昌 氏 (滋賀県立大学)

「オリンピックと都市再編:施設配置と資金調達の視点から」

司会: 清水論 (筑波大学)、水上博司 (日本大学)

##### 3) シンポジウム報告書の作成

新設する専門領域ホームページ上に PDF ファイルとして公開する。

#### 3. 編集委員会

##### 1) 体育社会学専門領域一般発表 論文集第23号 500部発行 (2015年8月7日発行)

#### 4. 学生研究奨励賞選考委員会

##### 1) 学生研究奨励賞の選考

#### 5. 広報委員会

##### 1) 専門領域ホームページを新設する

#### 6. 事務局

##### 1) 専門領域の会員数 405名 (2015年7月22日現在)

##### 2) ニュースレターの発行

・ News Letter 2015 Summer issue PDF 公開と会員送付

・ News Letter 2016 Spring issue PDF 公開と会員送付

##### 3) 会則および規程改訂に関する会議

第1回 2015年6月25日 / 第2回 2015年7月13日

##### 4) 事務局会議

第1回 2015年2月20日 / 第2回 2015年7月18日

第3回 2016年2月20日 / 第4回 2016年2月26日

#### 7. 2015-2016年度専門委員会

松村和則会員の評議員辞退に伴い杉本厚夫会員が研究委員会に加わるようになった。

#### IV. 2015年度 予算

日本体育学会体育社会学専門領域 2015年度予算		
収入の部		
項目	2015年度予算	2014年度決算 (前年度実績)
会費(学会本部より)	1,125,000	1,134,000
会費(事務局直接入金)	9,000	0
学会補助金	103,448	104,700
論文集等販売	20,000	2,000
(小計)	1,257,448	1,240,700
前期繰越金	1,437,280	1,287,669
収入合計	2,694,728	2,528,369
支出の部		
項目	2015年度予算	2014年度決算 (前年度実績)
通信・運搬費	80,000	79,124
事務・用品費	100,000	80,930
旅費・交通費	250,000	60,496
論文集印刷費	350,000	292,400
ホームページ	200,000	0
会報等印刷費	50,000	374,888
会議費	100,000	34,251
謝金	150,000	80,000
アルバイト費	100,000	59,000
学生研究奨励賞	30,000	30,000
業務委託費	50,000	0
手数料	7,000	0
(小計)	1,467,000	1,091,089
予備費	1,227,728	-
次期繰越金	-	1,437,280
支出合計	2,694,728	2,528,369

#### V. 会則および諸規程等の改訂について

- (1) 体育社会学専門領域会則
- (2) 体育社会学専門領域委員会規程
- (3) 体育社会学専門領域役員選出内規

#### VI. 専門領域賞の創設について

事務局より専門領域賞の創設について提案があり、満場一致でこれを承認可決した。

#### VII. 合宿研究会の開催について

事務局より合宿研究会の開催について提案があり、満場一致でこれを承認可決した。

## VIII. 学生研究奨励賞の表彰

・村本宗太郎（立教大学大学院）

「運動部指導者からみた運動部の「聖化システム」と体罰に関する研究」

・河野洋（順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科）

「日本におけるスポーツとレイシズムに関するウェブコメントの現状

—書き込みの感情価に着目して—」

## IX. 次年度の学会大会について

2016年8月24～26日 於 大阪体育大学

### 2015年度学生研究奨励賞受賞者コメント

#### 「学生研究奨励賞を受賞して」

村本宗太郎（立教大学大学院）

受賞タイトル：「運動部指導者からみた運動部の『聖化システム』と体罰に関する研究」

このたびは、日本体育学会体育社会学専門領域学生研究奨励賞という大変栄誉ある賞にご選出いただき、誠にありがとうございました。この場をお借りしまして、選考委員会の先生方、指導教授である松尾哲矢先生、様々なご指摘を賜りました皆様方、非常にセンシティブなテーマである本研究の調査に対して、ご協力を賜りました全国の高校バレーボール部指導者の皆様方に深く御礼申し上げます。

私は、これまで運動部での体罰問題に関して、指導者と部員ら運動部当事者の間での倫理的な問題ではなく、運動部という空間および構造に体罰を許容してしまう要因があるのではないか、という点から研究を進めて参りました。今回受賞対象となりました「運動部指導者からみた運動部の『聖化システム』と体罰に関する研究」は、高校バレーボール部の指導者を対象とした調査において、運動部指導の態様や、運動部指導に対する考え方等を問うことで、運動部での体罰が、指導の一環として捉えられてしまう運動部の場の構造、その背景となる、指導が聖なる行動として捉えられてしまう運動部空間の様相について検討することを目的として実施しました。調査結果に関して、指導者の行動と意識に着目し、部員に対して指導者の指示通りにプレーすることを強く要求し、自身の命令に対する強い従事要求をする指導者は、自らの指導が絶対的で聖なるものであるという「指導の聖化」状態へ陥り、体罰実施に及びやすいことが示唆されました。またこのような指導者は、練習内容や選手選考を自分一人で決める傾向があり、指導者が考える内容に引き寄せた指導を行う傾向が強く、指導経験の長く指導実績が高い傾向も看取されました。

本研究を進めている段階で、アンケート調査用紙を郵送してからは、非常に難しいテーマである体罰問題に関するアンケートに対して、日々ご多忙な高校の先生方が回答をしてくださるのだろうか、という心配は常にしておりました。ですので、返信された245部の調査用紙は大変貴重なデータであると強く感じております。

今後の研究課題としましては、本研究で実施した調査と関連した内容を、運動部当事者である部員に対しても実施し、運動部の「聖化システム」に関して、部員側の認識を検討することが挙げられます。また、今回は高校バレーボール部の指導者を対象とした調査となりましたが、運動部での体罰問題として研究を行う上で、競技種目の違いによって、どのような傾向がみられるのか、ということに

についても今後検討を進める必要があります。

今回の受賞を励みとしまして、今後も運動部の諸問題に着目し、世間一般では「特殊な空間」として語られる運動部の特殊性について明らかにすることをはじめとして、体育社会学の発展に貢献できるよう、研究に対する一層の精進をして参ります所存ですので、皆様からの変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



### 「学生研究奨励賞を受賞して」

河野洋（順天堂大学大学院）

受賞タイトル：「日本におけるスポーツとレイシズムに関するウェブコメントの現状

—書き込みの感情価に着目して—」

日本体育学会第66回大会（2015年8月25日～27日／国士舘大学世田谷キャンパス）にて、学生研究奨励賞という身に余る賞をいただきました。共同研究者である順天堂大学北村薫教授、審査委員の先生方、日頃よりご指導いただいている領域関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

発表演題「日本におけるスポーツとレイシズムに関するウェブコメントの現状—書き込みの感情価に着目して—」は、近年より深刻な問題となっているウェブ上の人種差別的な書き込みに関する、体育・スポーツ領域での基礎研究となります。ウェブ上の書き込みに対してはそれ自体に長く問題意識が持たれてきましたが、スポーツの持つ文脈によって焦点化されたウェブ上のレイシズムという課題は、体育・スポーツ領域においても研究の意義があるテーマだと考えています。

研究では、2014年度に「Yahoo!ニュース」で配信されたスポーツニュースに対するコメントの調査を行いました。収集された約160万件のコメントからサンプリングした後、感情価に基づきコメントを分類し、異なる人種に対するネガティブな書き込みをレイシズムの表出として集計・分析しました。結果として、①対象となったウェブ空間にレイシズムの表出と認められるコメントが一定数存在すること、②「韓国人」「朝鮮人」に対するネガティブなコメントが特に多くみられること、③国内ニュースへのコメントとの比較において、スポーツに関するコメントに独自の傾向がみられることなどが示されました。

発表の後、研究に対して多くの方からご指導、ご指摘をいただきました。その中で、当該研究が射程とするレイシズムの範囲をどのように設定していくかはひとつの課題となっています。異なる人種への単純な侮蔑と、政治的・歴史的な文脈の中で生じる人種意識との間には相違がみられます。しかし、これらの認識によってウェブ空間を複眼的に捉えることで、スポーツが取り組むべき問題の境界が見えてくるのではないかと考えます。当該研究でのレイシズムの定義については、オーストラリアのアンチレイシズム・キャンペーン”Racism. It Stops With Me”が述べる「カジュアルレイシズム」を採用することで整理を試みています。カジュアルレイシズムは、ステレオタイプや偏見に基づく、必ずしも人種主義的信念に寄らないレイシズムの一形式とされています。また、そのようなレイシズムが「真のレイシズム」の影で軽視されている状況を指摘しています。今後の研究においては、レイシズムという語の指すところを都度整理しつつ、スポーツのアンチレイシズム・ムーブメントにとって有

用となるような知見を示すことができればと考えています。

その他、研究者個人としても課題は山積しておりますが、この度の受賞を糧に、より一層邁進する所存です。今後とも変わらぬご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

## 影山健先生追悼

### 「厳しく、優しく、筋を通す人」

森川貞夫

去る6月16日、愛知教育大学名誉教授影山健先生が亡くなった。影山先生といえば若い人たちにはおそらくいつも学会では前の方の席から「その研究は社会にとってどういう意味があるの？」という、ラディカルな質問に攻められて答に窮したりして怖い人というイメージが強いのではないかと思います。それは学会ばかりではなく、市民運動家としても常に権力批判をしておられた方、そのもっとも典型的かつ最大のインパクトは1988年の名古屋オリンピック招致活動に真っ向から反対し、『反オリンピック宣言』（影山健・岡崎勝・水田洋編著、風媒社、1981年）を掲げて開催都市を決める1981年のIOC総会（バーデンバーデン）にはビラまきやデモなど、その行動力は並みの研究者ではできないバイタリティにあふれるものでした。

したがって影山先生が元文部省体育局スポーツ課専門職（最終肩書は体育課係長）であったとは誰も信じられないことでしょう。実は私が最初に影山先生に出会ったのも1960年の文部省の中でした。当時は影山先生だけでなく体育社会学関係では三好喬（元広島大学教授）先生も専門職員として文部省体育局に勤めて居られ、私たち後輩学生は職員が居なくなった後の体育局でほぼ真夜中にスポーツ振興法の国会審議に合わせて「質問通告」の「模擬回答」づくりの手伝いをしていたのです。タイガー式計算機を回したりガリ版切り（今やこれらは死語！）に追立てられていたのですが、時折、三好・影山両先輩を通して食事の差し入れなどでほっと一息入れたのも懐かしい思い出です。

さて、私が初めて影山先生を「怖い」と思ったのは1960年秋の大山合宿ゼミ（竹之下休蔵教授の私的ゼミ？）でした。参加者は竹之下教室の1期生であった三好喬・影山健・糸野豊（敬称略、以下同じ）、その他専攻科の牧野澄子（後の影山夫人）、神文雄・飯島俊明、さらに卒業生であった武笠康雄（東京農工大）、他に当時文部省でスポーツ振興法制定に尽力されていた金田智成、東京農工大の豊沢登教授（農村社会学専攻だが都市社会学の磯村英一教授とともに東教大体育社会学研究室非常勤講師）など、まさに錚々たるメンバーに混じって、どういうわけか学部3年生だった私が夏休みのレポート課題としてやった「瀬戸内海の農村青年のスポーツ・レクリエーション活動調査」の報告をしたのでした。発表が終わるといきなり影山先生から「君ねえ、科学的な研究発表にやたら『貧しい』だの『悲惨な生活』など形容詞は使わないで具体的にどう貧しいのか、どのような悲惨な生活なのか『事実』を述べるだけでいいんだよ」と批判されました。それ以後も何かにつけ私の論文の方法あるいは内容について厳しい批判を受けたのは言うまでもありません。

以来、半世紀以上に及ぶ影山先生とのお付き合いだったのですが、いくつか思い出として深く残っているのは、1979年のポーランド・ワルシャワでの国際スポーツ社会学会（ICSS）セミナーだったかで副会長兼IRSS編集長のWohl教授宅で当時のICSS会長Lueschen、事務局長のKenyonらと同席したことです（写真はWohl教授夫人と影山夫妻、それにLueschenを挟んで左がWohl,右がKenyon、

いずれも Wohl 教授宅)。実はその前年の 1978 年に日本学術振興会招聘教授として私が居た日体大に Wohl 教授夫妻が来日、約 2 か月半滞在した折に愛知、福山、広島などを訪ねて講演、その時に愛知では影山先生を中心に中島豊雄・西垣完彦その他多くの東海地区のメンバーが研究会を開き、かつ長良川の鶺鴒や瀬戸の陶器祭にも招かれて歓待されたことへの返礼だったのです。これ以来 Wohl 教授の好日家ぶりは尋常ではなく、国際会議で出会うたびに「健は元気か、ヒロはどうしている？」と尋ねられたものです。こういうご縁で後に影山先生が ICSS の理事になられたのだと思います。



もう一つ強く印象に残っているのは 1986 年に筑波大学で開催された日本体育学会大会における体育社会学専門分科会シンポジウムでのできごとです。テーマは「生活指導をめぐる（体育教師の体罰問題）でしたが、影山先生も演者の一人としてキーワードに「体育教師、体罰、管理主義教育、体育と暴力」を挙げて「報告」（その時のレジュメは日本体育学会 HP を検索すると出てきますのでご参照ください）されたのですが、一通り演者の報告が終わってフロアとの討論になった時、関西のある大学の強面で名高い K 教授が影山先生を名指して「君はスポーツをどの程度していたのか」という、質問というよりなじるような「発言」をされた。その時影山先生は「今の質問は今日のテーマや報告の内容とはまったく関係が無いので答える必要はありません」と、まったく相手にされなかったのです。きっと K 教授は体育会系運動部の経験の無い者が「体罰問題」についてあれこれ「理屈」を言うのが気に入らなかったということだったのでしょう。その当時の体育学会も実技の実績がものを言う世界であったのです。しかしこの毅然とした影山先生の発言に K 教授は引き下がらざるを得ませんでした。後でわかったことですが、影山先生がバスケットボールの名手がかつまたスキーの腕前もたいへんなものであったということですが、先生はまったくそのことは披瀝されることはありませんでした。そしてこの時のレジュメの最後に「体育教師は、一般的にいても校務や子どものために多忙である。しかし、『子どものために』ということで市民的生活が犠牲にされることは、決して子どものためになるとは限らないということを銘記すべきである」と書き、「市民としての生活の充実」を説かれていたのです。

影山先生と最後にご一緒するはずだったのが、2014 年 4 月 14 日です。東京駅から新幹線を乗り継いで Prof. Jennifer Hargreaves を岡崎の影山邸に私が案内することになっていたのですが、私の手違いで予定していた「ひかり」に乗らないで別の列車になってしまい、あわてて彼女と娘さんたち家族だけを乗車させてしまい、その後は電話連絡で取り次ぎ、どうにか無事に影山先生自身が豊橋かどこかにお迎えになり岡崎まで案内されたのです。影山先生はかなり前から彼女の前の夫である John Hargreaves をふくめて家族ぐるみのお付き合いがあったようで、とりわけこの機会が最後の彼女たちとの「遭遇」になると覚悟されておられたようでいぶん奥様のご心配されていたのですが、どう

しても岡崎によびたいと明治大学の寺島先生にも伝えておられたようです。それで私が岡崎まで帯同するはずだったのですが、返す返すも残念なことをしました。後から鄭重なお詫びとこの時に影山先生のために用意していたお土産を宅急便で送ったのでした。後から礼状が届きましたが、まったく「後の祭り」とはこのことで生涯後悔することになりそうです。こんなわけで影山先生にはまったく頭が上がりません。

影山先生が亡くなる直前までラディカルに「反オリンピック」を貫いた証として「NO OLYMPICS > 反五輪の会」の「東京オリンピック返上デモ」（2015年10月20日）への賛同メッセージを紹介します。題して「今は、オリンピックなどに浮かれているときではない」です。

今、日本は、福島原発事故による環境汚染等、未曾有の深刻な問題を抱えています。このような時に、為政者が「復興五輪」とか「汚染水問題は完全にブロックされており、コントロールされている」等々、大ウソをついてまでオリンピックをやりたいがるワケは、いったいどこにあるのでしょうか。

ここで私たちは、前の「東京オリンピック」（1964年）開催の後はどうであったか、その歴史社会的状況について改めて吟味してみることが重要であると考えています。日本の教育の右旋回を急速に進めた文書として有名な「期待される人間像」という資料があります。これが正式に出されたのは1966年、中教審の答申としてです。その後、ときの荒木文部大臣は「国防意識の養成」を強調しています。これらの歴史を見ると、まさに「ナチオリンピック」の再来を思わせるものでした。

いま安倍内閣の目指しているものは、憲法改悪であり、天皇中心の国家主義化であり、「強い日本！」の構築です。私たちはこのような状況を決して見過ごすことはできません。しかし日本の右傾化は、決して為政者だけが作り出すものではなく、社会状況に無頓着な「国民」が作り出すものです。オリンピックはそのような「国民」づくりに、大いに「貢献」してきたし、また「貢献」するものであることを忘れてはならないと思います。

最後の最後まで言葉の正確な意味でラディカル（根源的）を貫き通した一生はみごとというしかありません。合掌



2014年4月14日 Prof. Jennifer Hargreaves と



## 事務局より

### 1. 会員動向

体育社会学専門領域の会員数（2016年7月20日現在） 410人

### 2. 会員情報変更

日本体育学会会員の名簿管理は学会本部が行っております。勤務先の移動、住所・所属などの変更があった場合には、すみやかに「会員情報変更届」（『体育学研究』に添付）を学会本部事務局に FAX または封書で送付してください。学会本部とともに専門領域事務局にもメールでご連絡いただくと助かります。

### 3. 会則および諸規程等の改訂版について

2015年度総会報告にもあります体育社会学専門領域会則ならびに諸規定の改訂版は、随時専門領域ホームページに掲載いたしますので、ご確認ください。

事務局メールアドレス（松尾）tmatsuo@rikkyo.ac.jp

（水上）mizukami5.h@gmail.com

## あとがき

オリンピックリオデジャネイロ大会が開幕した。体操、柔道、競泳と日本代表選手の活躍が目覚ましい。その様子を報道する大手新聞社の一つは、「日本のメダル？個」というタイトルの記事を書いている（朝日新聞 2016年8月6日付朝刊）。各競技種目の担当記者がそれぞれの競技種目における獲得メダル数を色別に予想する、という内容である。その記事によると、予想獲得メダル数は金15、銀8、銅15、計38なのだそうである。IOCは国別、色別のメダル統計を発表しておらず、メダル競争を煽るこうした数字は、各国メディアによって独自に集計され公表されている。

他方、同紙の翌日の紙面に望月秀記氏（元日本水泳連盟広報委員）による「メダル目標 公表しない米国競泳」という記事（朝日新聞 2016年8月7日付朝刊）を見つけた。米国競泳界ではチームとしても個人としても目標とするメダルの色や数を公表していない、それは、競技結果は自分でコントロールできず、自らコントロールできることに意識を集中すべきだから、という趣旨である。

オリンピック大会の開催も多くの都市で二巡目に入り、成熟した都市におけるオリンピック開催の意義は何なのか、その模索が始まっている。「国威発揚へとつながるメダル競争からは卒業する。」そのようなメッセージを東京 2020 で受けることはできるのだろうか。

近代スポーツの政治性、抑圧性に一貫して異議を唱えてこられた影山健先生が逝去された。影山先生が主導されてきた反オリンピック運動、トロプス運動などは、現代においてもその意義や輝きを失っていない。末筆ながら、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（高峰修）